

近世江戸期における経済思想と各商家の内部 報告会計実践

CHIBA, Junichi / 千葉, 準一

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

76

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

269

(終了ページ / End Page)

293

(発行年 / Year)

2009-03-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003966>

【研究ノート】

近世江戸期における経済思想と各商家の 内部報告会計実践

千葉 準 一

1 近世日本への外国人の関心

二つの急成長

第二次世界大戦後の急速な日本の高度経済成長は、欧米人やアジア人達に驚きを与え、その常識を覆した。しかし実は、日本史に熟知した外国人研究者達にとって、日本の急成長は必ずしも戦後に固有のものではなく、明治維新前後を起点とする日本の近代化過程において既に経験済みのものであった。

古代以来、政治・経済・文化を中心とするあらゆる領域において、日本に絶対的な影響を与えてきたのはいうまでもなく大国中国であった。しかしその中国（清）は、1840年のアヘン戦争によって欧米列強の本格的な支配下に入る。この事件が当時の日本人に与えたショックは、現在の日本人の想像を遥かに超えたものであったはずである。1844年にオランダ国王から開国の進言（強要）を受けた日本は、結果としてその10年後に開国し、1868年には明治維新を断行して「脱亜入欧」を遂行する。

ところが、明治維新以後3分の1世紀しか経過しないうちに、日本帝国は大国ロシアとの戦争（1904/05年）に勝利し、第一次世界大戦後のベルサ

イコ講和会議には、世界の5大国の一員として世界に登場するまでの急成長を遂げ、欧米人達を驚愕させたのである。

海外の日本研究者達は、こうした明治期以降の急成長の後に起こった日本帝国の膨張主義と第二次大戦での破滅の過程との文脈の中で今日の日本論を展開している。戦後における経済の急成長は、あくまでも二つ目の急成長なのであり、現在、日本は第二ラウンドの最中にあるのである。日本は再び「いつか来た道」を歩むのか、それとも？

本稿では、とりわけ海外の研究者が強い関心を有する近世江戸期における日本の経済思想を整理することから出発し、近世各商家の内部報告会計実践の様相を概説することにしたい。

日本の近代化を醸成した「封建社会」

明治期以降、アジアの中で、何故に極東の局地である島国の小国日本のみがこうした急成長を達成しえたのか。

かつて M. ヴェーバーは、近代資本主義が西欧の中心地（中原）ではなく、むしろ局地英国で開花したことのひとつの歴史的因果性を、宗教（プロテスタント）的な禁欲的生活態度（Ethos）に求めた。そして彼は『宗教社会学論集』の中で、日本の浄土真宗を西欧のプロテスタンティズムに比較することができるかと述べている（Weber, 1921: 303; 訳書: 92）。

しかし宗教的倫理と近代資本主義との歴史的因果性の問題を日本に適用する場合には様々な困難性につきあたる。仏教文化圏の本家はインドであり、また儒教文化圏の本家は中国なのである。とりわけ「朝鮮同様に、すべての教養主義が中国に由来する日本」（Weber, 1921: 295; 訳書: 80）の場合には、当面、宗教以外の局面で、他のアジア諸国との対比の構造を析出しなければならない。

当時の K. フローレンツや K. ラートゲンの先行的な日本研究を参照した M. ヴェーバーの日本論は、以下のような論述となって表現される。

「日本の仏教や宗教一般については、それ自体きわめて重要な興味を呼ぶ問題であるが、ここでは二次的に、しかも簡潔に述べるにとどめる。というのはわれわれの文脈で重要な、日本人の生活態度の『精神』(Geistes)に固有の性格が、宗教的要因とはまったく異なった事情によって形成されているからである。すなわちその事情とは政治的・社会的構造の封建的(feudalen)性格である」(Weber,1921:296; 訳書:81, 上点, 原著者)。

日本の急成長を用意したものは、長い間の日本における政治的役職の授封を基底とする封建社会の存在であった。その際、封建日本の状態は、中国の封建的分権国家時代と類似していたが、日本では、非軍事的文識者階層ではなく、職業的武士階層が重要な勢力となっていた点で中国とは著しい対照をなしていた、というのである。

中国におけるような科挙試験による学者的教養や、インドにおけるような救済哲学ではなく、武士道に象徴される(これは中世西欧における騎士道に対応する)世俗内的教養が、日本の実践態度を規定し、中国にみられた「停滞化」(Stereotypierung)を阻止しえたとウェーバーは述べる。

武士階層が一民族において決定的な役割を演じていた場合には、独力では合理的経済倫理を形成することはできなかったが、ヨーロッパ的「個人主義」や中国の神政政治以上に、「近代化」への一層適切な基盤を提供しえた。日本は資本主義の精神を創造しえなかったとしても、完成された資本主義を外国から比較的容易に導入することができた、というのである。

それでは具体的に、近世における日本の経済思想や近世商人の合理的な生活態度(Ethos)とは、どのようなものであったのか。

2 近世日本の経済思想

近世における商人の身分

近世初期（安土・桃山時代）の商人達は、^{ルソン}呂宋や^{シヤム}暹羅等を中心とする海外諸国との自由な交易が可能であり、彼らは自らを軍事的世界とは無関係な「無縁所」としての市場町において自由な活動を展開することができた。こうした聖域としての市場を商人達は「公界」、また共同の苦しみを分かち持つ「苦界」、そして休息・想像を意味する「楽」とよんで、職業団体としての公共的な生活圏を確立しようようにみえた（Najita,1987:18-9; 訳書, 1992:323）。

しかしこうした冒険的商人は、西欧的な意味での「ブルジョア階層」を形成することはなかった。徳川時代の鎖国政策と「土農工商」という身分制は、17世紀前半には軍事的体制の「担い手」である武士を合法的実在として「公的」に認知すると共に、他方幕藩体制の財政的「担い手」（納税者）としての農民を、職（工）人・商人の上に位置づけた。

そのため、商人達の「公共的」な聖域であったはずの市場は「公的」な観点からみれば単なる「私的」な存在に転化する。またそれ故に、そうした世界に住む商人は、都市に住む者（町人）の中でも「私的」利益のみを追求する情欲をもった人間であるというレッテルをはられ、社会の下層に位置づけられることになったのである（Najita,1987:20; 訳書, 1992:34; 源, 1968）。

こうした徳川時代の身分制によって、商人達は政治寄生的な御用商人・投機的商人としての道をあゆまざるをえなくなる。しかし江戸初期の商人は、特に大名への債権（「大名貸」）の回収不能によって、次々と破産していった。このような情況下で、名目的には社会階層として不利な立場に位置づけられながら、同時に継続企業（going concern）としての立場を確立

しようとする商人階級は、「私欲」を超えた儉約・禁欲の思想を中心とするイデオロギーを「自生的」に創り出していくのである。またそれ故に、そうしたイデオロギーは、確実に他の階層にもつながる「普遍的」なものでもなければならなかった。

思弁的合理主義としての朱子学の日本における変容

徳川時代の儒教思想の展開については、日本政治思想史における次のようなシェーマが定着している。

それは、藤原惺窩・林羅山によって日本的に定式化された朱子学が、伊藤仁斎の古義学と山鹿素行の実践的な学問に分化し、それらが荻生徂徠によって集大成されていくというものである。

ここで朱子学とは、「理気説」を基底とする周濂溪から朱熹（1130年-1200年）に至る一連の理論（程朱学または宋学）であり、それは、自然の原理と人間の倫理とを一元的に結びつけ、万物に貫通する「理」（reason）、または「理の総括者」としての「太極」を、自然世界のみならず人倫の世界にまで一元的に演繹する。そこでは物理は人間の道理であり、自然は当然であり、自然法則は道徳規範でもあるという思想体系であった。

朱子学は、当時の武士を中心とする指導者層に「薫陶育成」（自己陶冶）の精神を根づかせ、彼らの「責任倫理」の形成に重要な役割を果たした。他方、近代科学思考の基礎を有しない「思弁的」合理性に基づく朱子学が日本に受容された際、そこでは幕藩体制の「上下定分の理」（上下の身分の違いの先天性・宿命性）が強調されていく。すなわち朱子学は、各人の身分の上下関係を正統化する理論として定式化されたのである。

荻生徂徠（1666年-1728年）は、朱子学における物理と心理、存在と当為、自然と人為の双方の世界を貫通するところの万物の存在における秩序の原理である「理」を、自然を中心とした経験合理的な必然的法則としての「理」と、人間界を中心とした精神の自由な世界における当為としての「理」とに分離させた（丸山、1941）。

また徂徠は、徳川社会の知行地を基底とする封建制と、他方、何ら生産性を有しない武士階級の城下町への集中（集権制）という二重構造の故に、元禄時代に象徴される商業革命によって商業資本の運動に巻き込まれてしまった幕藩体制の構造的な問題を洞察した。そこから「経済」学、すなわち治国安民の「経世済民」論・「経国済民」論への道を拓いたといわれる。

しかし徂徠以前にも、既に熊沢蕃山（1619年-91年）は、朱子学・陽明学等の影響の下で、奢侈と貧困の原因が貨幣経済の浸透にあることを見抜き、重農主義（physiocratie）的な思想を提示していた。

西欧の重農主義者ケネーは、同時代の人から「ヨーロッパの尊敬すべき孔子」と呼ばれていた。近世初期の西欧と日本との経済思想に、こうした中国思想を媒介として「ときおり現れる類似点は、単なる偶然の一致以上のものがあるのである」（Suzuki,1989:12; 訳書,1991:22）。

商業を正当化するイデオロギーの先駆者

徂徠の経済学（経世論）は、あくまでも幕藩体制の側からの秩序維持の観点から展開されたものである。そこでは朱子学の思弁的合理性を否定する余り、科学的・経験的合理主義そのものから無縁になる危険性を孕んでいた（源, 1971:16）。そしてまた、商業革命の元禄時代（1688年-1704年）以降、蕃山の重農主義的思考や徂徠の武士土着論（「武士は知行地に還るべきである」）は、時代の流れに即応するものではなかった。こうした状況下で、本格的に商業を正当化するイデオロギーが「市民（町人）社会」の側から形成されていく。

ナジタ・テツオ著『懐徳堂』は、江戸期の商人や他の庶民の日々の生活や仕事が「徳」（virtue）の実践・実現であったことを示した思想家として、伊藤仁斎（1627-1705）の重要性を強調する。仁斎は素行や徂徠とは異なり、政治的支配者・被支配者という上下の区分よりも、同情・共感の思想を基底として人間の普遍的な「水平性」（horizontality）を強調した（Najita,1987:27-8; 訳書, 1992:46-7）とする。

そしてナジタは、仁斎の次の世代の西川如見（1648年-1724年）が、商人や他の庶民の他の階層の人々に対する道徳的能力の平等性を強調する「志向性」を有していたという点で紛れもなく仁斎の後継者であったことを示唆している（Najita,1987:578; 訳書, 1992:96）。

長崎出身の商人・天文学者であった如見は、代表作『町人囊』^{ちやうにんぶくろ}において、「富」が農産物を中心とする生産された財と現金通貨との総和であると述べる。こうした生産財と通貨とは、共にあらゆる階層にとって有益な「社会的」媒体であり、またそれ故に社会的・公的所有物なのである。

「商のみちとは、金銀をもって物を買とり、利倍をかけてうる事のみにふにあらず。……天下の財物を通じ国家の用を達するを、真の商人とはいふなり」（西川如見,1719/1975:889, 上点, 引用者）。

それ故「商人」^{あきびと}の公共的役割は、生産財に見合った交換価値を具体的に商量・計量する客観的の媒介者となることである。領主は公という無私のも原理と一体化しなければならない。農民は時に従って収穫しなければならない。そして商人は商品と現金の流れに介入する精確な時期を計り、適正な利益の計算に関する客観的分析や判断を提示しなければならない。利益の極大化ではなく、より基礎的な自然規範に適った公正な利益取得の倫理性に自己を抑制すべきであると主張したのである。

如見にとり、市場の商人は、根本的に他のいかなる階層の間人も同様に倫理的な「徳」を実現しうる者であり、公共の善を高めるべき存在者であったのである（Najita,1987:4856; 訳書, 1992:8093）。

近世商人思想の展開

18世紀日本における庶民の最も重要な唯一の組織は、精神的目的を共有する共同体としての「講」であった。徳川時代の商業教育の進展に伴い、「講」は、一方では「懐徳堂」や「含翠堂」のような固定的な継続組織と、

他方では石田梅岩（1685年-1744年）を創始者とする「石門心学」（1729年創設）、すなわち移動的で拡張的な「細胞」のようなものへの方向に機能分化していった（Najita,1987:77;子安訳,1992:1278）。しかしいずれも、そこでのメンバーの関係は階層を超えた同志的な「水平的」関係を基盤としていた。

石門心学とベラーの方法

石田梅岩は、武士の俸禄は法律や慣習によって固定されているが、商人の利益は市場環境や商人の熟練度によって絶えず変化するものである。それ故、市場のすべての商取引に最大限の価値を提供することが「商人の道」（way of merchant）であると主張する。

「商人は、精密に計算をしてその日その日をおくるものですから、一銭もおろそかにしてはならない。……金銭を惜しくないと思う心が起これば、それは人びとを善にみちびくことにほかならないでしょう。そのうえ国や貨幣や物資が流通して、すべての人びとを満足させるのですから、『春夏秋冬が交代して、すべての生き物がおのずから養われる』のと同じように、理屈にあったことでしょう。」（石田,1738/1972:1956）

政治寄生的商人の多い江戸でではなく、むしろ京都等を中心に受容された梅岩の商人倫理は、1950年代後半の初期の R. N. ベラーの研究によっても、西欧の近代資本主義形成における「プロテスタンティズムの倫理」に匹敵する、日本の近代化を促した重要な徳川宗教思想の一つとしてその意義が強調されている（Bellah,1957）。

ベラーの考えでは、近世日本の価値体系では「政治的」価値が終始中核的位置を占め、「忠」（loyalty）が「孝」（filial conduct）よりも重視された。これは、「統合的」価値を重視し、「孝」を「忠」よりも優先させた中国と対照的である。但し、近世日本の商人の場合、「奉公」は、「商家」を超え

る政治体系よりも第一義的には「家」の半神聖化と結合し、店員の主人に対する忠勤をその主要内容とした。またそこでは「自己利益主義」よりもむしろ「家利益主義」が主要な動機となったのである。

そしてこうした「家」の半神聖化が、家名の高揚という目標達成に導かれた個々の成員の日常的な節約と労働による業績の達成を促し、取引関係における信用・正直といった普遍主義的規準を強化することにつながり、西欧流の「経済的合理化」の方向に作用することができた(丸山, 1958:343)というのである。

ベラーは、商人の職分論について、無我の献身による宇宙・世界との同一化を説いた石田梅岩の「世俗内的神秘主義」が、農民(また一部の武士)を含む民衆の内的要求に訴えたことで、単なる倫理的訓戒を超えた禁欲的生活態度(Ethos)の形成に貢献したとする。そして幕末から維新にかけての「石門心学」の衰退・消滅にも拘わらず、実質的には日本の産業化の時期における企業家・労働者双方の内的規律の形成を用意したと捉えたのである。

梅岩の商業活動の正当化は、かつてハーバート・ノーマンが「忘れられた思想家」として共感をもってとりあげた、ユートピア主義者、安藤昌益のように、武家社会の身分制度そのものの変革を志向したものではない(Norman, 1949; 大窪訳, 1977)。

しかし、こうしたベラーの方法が興味深いのは、梅岩の商業思想を当時の市場「経済」の「反映」(response)の問題としてではなく、商業社会から産業社会への過程の中で果たした歴史形成の「推進因」(cause)として捉える視点を提示している点にある(Suzuki, 1989:28; 訳書1991:47)。

懐徳堂と山片蟠桃：実学の先駆者

1710年に創設され1726年に大阪商人の公的学問所として承認された懐徳堂は、1869年(明治2年)に閉校されるまで150年間も存在し、商人・庶民教育上、重要な位置を保持し続けた。

18世紀末から19世紀にかけて、懷徳堂の思想的広がりと変容を最も完全に要約したといわれる大阪商人の総合的な認識論である、山片蟠桃（1748年-1821年）の『夢ノ代』^{しる}（山片, 1820/1973）が登場する。

大阪の両替商升屋の番頭小右衛門であった蟠桃は、升屋の火災の際にも消失した『掛帳』の数字をすべて記憶していてその窮地を救った逸話の持主である。彼はまず懷徳堂に入門し中井竹山の門弟となった。朱子学から出発しながら、歴史的方法より普遍的な自然の理論、特に天文学を中心とする経験科学的・合理主義的方法に依拠して「理」の原理から経済的合理性の規準を演繹し、儒教的封建道徳と西欧型の科学的宇宙観とを結合しようとした。

特に1792年にロシアのラクスマンが漂流民大黒屋光太夫を日本に送還し、通商を迫った事件は、蟠桃に強い衝撃を与えた。ラクスマンの勇気は、確実に科学的・合理的な知識に由来することを強調する。また蟠桃は、1804年世界一周を成し遂げて長崎に来航したレザノフの勇気をも激賞し、そうした勇気の源も、同様の知識に由来すると考えた。

蟠桃の『夢ノ代』は、筆写本で仲間の中にだけ流布され、江戸時代には公刊されることのなかった書物であり、後に同じく知識を勇気の源泉とする実学を謳った福沢諭吉が本書を読んだ形跡はない。しかし蟠桃の思想は、後年の福沢の「実学」の思想を先駆する。ただし福沢の実学が「一身独立」のためのものであったことと比較すると、蟠桃の実学観は「忠君仁義」のためにあるべきだという当時の儒教観の範囲内にあった。

A.クレイグは、蟠桃が自然と人為の双方を貫徹しながらも、キリスト教一元論にも裏付けられず、またプラトンのな存在原理とも異なる朱子学の「理」を復活させた代表者であることを示唆している。

そして蟠桃に代表される「19世紀初期の、医学をのぞくほとんどすべての科学的な著述はこの朱子学の枠内で書かれていたように思われる」（Craig, 1965:1346; 訳書, 1968:1403）と述べている。

しかしながら、蟠桃の時代の朱子学の「理」の理解の仕方は、17世紀の

江戸初期の朱子学の思弁的な「理」と比較するならば、すでに遥かに（自然）科学的な基礎を有するものに進化していたように想われる。

海保青陵と市場の「理」

他方、武家(家老)出身の海保青陵（1755年-1817年）も、蟠桃と同様に農本主義的思考を否定し留めようのない商業資本の運動に即応しながら社会改革をなすべきことを主張した。

青陵は、売買・取引関係が「天理」（市場原理）であり、武士社会の君臣関係にまで客観的に適用されるという思想を、支配層（武士層）の側からではなく、普遍的な原理として提示したのである。これが、武士も儉約策のみならず、商人以外の武士を含む万民が通商活動をなすことによって、藩財政の再建に努力すべきであるという主張につながっていく。

青陵は近世日本における重商主義（mercantilism）的思考にそって、儒教倫理の美德の側面を初期資本主義経済にとっての重要な価値要因として捉え直そうとしたのであった。

こうしたアプローチは、「すべての社会関係を本質的には市場取引の関係として解釈するアプローチへと」（Suzuki,1989:334; 訳書,1991:567）発展する。まさに「座（市場、引用者）ヲヘヌシロモノハ通用セズ」（海保,1813/1970:259）ということなのである。こうして市場での交換は、儒教思想の「理」と原理的には同一であるとされ、商業と利潤は万物の自然的な秩序によって合理化されるのである。

青陵は、自己が置かれている時代を「利を争う世」と考える。「時と時を合せ、人と人を合せ、言葉と言葉を合せねば公論にあらざ」と述べる。すなわち青陵は、いわば「法家思想」の立場から、各人の利害が葛藤する時期や人間性、また言語を媒介として、それらを調整する「公論」によって、経世済民の目的を実現するところに、学問の道があると主張した。『養心談』に表れるこの「公論」についてのすぐれた見解は、おそらく青陵をもって嚆矢とする（源,1968:31-2;1971:64）。

こうした市場の「理」に根拠を置く青陵の経世済民の思想は、佐藤信淵のような政治的統治者の観点からする「統制経済の思想」と鋭く対立するものであったとスズキは述べている（Suzuki,1989:345;藤井訳,1991:57-60）。ともあれ、こうして日本の近世「社会」の中で、合理的・科学的な経済思想が確実に形成されていったのである。

3 近世江戸期の合理的資本計算と内部会計報告制度

「イタリア式複式簿記」と「和式複式決算簿記」

日本における「西欧式複式簿記」の導入に関しては近世初期説と明治初期説がある。近世初期は、日本におけるルネッサンス的気分が充満した時期である。こうした時期に「西欧式複式簿記」の「着想」が日本に伝えられた可能性は十分に考えられる。しかし現段階では、近世初期説・安土桃山説は、まだほとんど原史料に基づく実証をなしえてはいない。

ともあれ近世江戸期商人の合理的精神は、各商家内部において、独自に様々な「複式決算簿記」を形成していった。ここで「複式決算簿記」とは、ある Entity が支配する経済財の変動として認識されたすべての取引が、勘定・貨幣情報に二重分類され、体系的に決算総括される帳簿記録体系のことをさす。従ってここでは、左右対称勘定型式や貸借複記仕訳型式等の形式的要件にはこだわらないことにする。

日本最古の商業帳簿——富山家の三帳簿——

現存する最古の商業帳簿は、1921年に大森研造により紹介された江戸初期から中期にかけての伊勢・松坂の豪商富山家三帳簿である。「文部省（現在は文部科学省）資料館」所蔵の原史料1,373点（カード総数967枚）の富山家文書は1966年に公開され、河原一夫により本格的に検討された。

その中で最古の『足利帳』には、1615年から1640年までの期間に毎年一

回実施された純財産（正味身代）増減計算による純利益の計算結果が記録されているが、損益計算の記録はない。『足利帳』は『大福帳』（河原,1977:8）または『永代記録簿』と解される。

第二の古帳は『羽書仕入帳』であり、1624年から1656年までの「羽書」（今日の商品券に相当する少額紙幣証券）の発行高・未回収高・焼却高・未焼却高が記録されている（河原,1977:1322）。一種の『負債勘定簿』とでもいうべきものである。

また第三の古帳は『寛永十五年寅歳算用帳』であり、1638年の貸借対照表と財産目録に相当する二つの部分からなる。これは「資産－負債＝正味身代」の財産計算の内容を有する決算簿であるが、損益計算の記録はない（河原,1977:22-8）。

『算用帳』は1638年のものしか現存せず、同年の「羽書仕入帳」の羽書未回収額（負債残高）は『算用帳』の負債の部に正確に計上されている。また『足利帳』は、『算用帳』の期末資本（正味身代）の計算結果を受けて総括的に累年記録したものであると考えられるので、少なくとも1610年代後半頃にはこうした1638年『算用帳』と同じか、又は同程度の機能を果たす決算簿が存在していたと類推される（河原,1977:27-8）。

しかしともあれ、現存する富山家の帳簿には、損益計算記録がみられないために、今日の段階では財産法による損益計算という以外にはなく、二重分類簿記（複式決算簿記）とはいえない。

和式複式決算簿記の形成

今日までの研究水準で複式決算が確認できる最古の事例は、大坂の鴻池両替店の1669/70年の「算用帳」である（作道,1966）。そして殆ど同じ時期、伊勢の川喜多家、三井家、長谷川家、また近江の西川家、中井家、矢野家等々において複式決算が実施されていた。

寛文期（1661年-1673年）から元禄期（1688年-1704年）は、都市の繁栄、新興町人の台頭というイメージで知られる。遠隔地商業や為替金融の発達

により、江戸・京都・大坂の三都と諸藩城下町との間で、全国的な商品流通が形成された時期である。こうした市場経済の「担い手」となったのは、近世初期の政治寄生的冒険商人にかわって台頭してきた上記の様な近畿出身の新興商人層である。また彼等のみが「和式複式決算簿記」形成の「担い手」にもなったのである（西川登, 1993:139）。地方商家に「複式決算簿記」が観察されるようになるのは19世紀以降であった。

当時の複式決算形式には以下の二つのパターンがあった（高寺, 1978; 西川登, 1993:5）。

[第一の決算形式]：期末資本の二重測定システム

期末資産－期末負債＝期末資本

期首資本＋収益－費用＝期末資本

[第二の決算形式]：当期純損益の二重測定システム

期末資産－（期末負債＋期首資本）＝当期純利益

収益－費用＝当期純利益

[第一の決算形式] に含まれるものは、前述の大坂鴻池本家喜右衛門「見世」の1669年度/70年度「算用帳」、伊勢富山家上州店の1707年下半年期「算用目録」、伊勢富山家大坂両替店の1758年上半年期「算用目録」等である。

また [第二の決算形式] に含まれるものとして、伊勢長谷川家江戸店1707年度「店算用目録帳」と「大黒」、同じく三井家大元方の1710年上半年期「勘定目録」、近江中井家仙台元方の1801年度「店卸目録」、同じく小野家南部別家の1837年度「勘定目録下書」等が挙げられる（高寺, 1978:1945, 西川登, 1993:17）。

そして江戸時代を通じ、第一の形式が第二の形式に転化することはなかったというのが今日の段階における通説である（西川登, 1993:6）といわれ

ている。

また複式決算簿記に類似したものとして、出雲地方の製鉄業田部家の「出雲帳合」がある（平井, 1936; 山下, 1936）。これは、「出目金勘定」（収支損益計算書）と「惣差引勘定」から構成され、両勘定の数字の結果が一致することから「両面勘定」とよばれている。しかし後者での計算は総括的な「資本勘定」を有しない財産計算であることから「複式決算簿記」であるとはいえない。

小倉栄一郎の『江州中井家帖合の法』（1962）は、「和式帖合法」の白眉である中井家の帳簿組織に実証的に接近した我が国最初の本格的な研究書であった。本書が日本「国内」の会計学界に与えたインパクトの重要性は、西欧に固有なものとしてその先進性しか強調されなかった西欧型「複式簿記」の「複記性」と「複式決算」機構が、中井家（1734年創業）の帖合法に確実に見いだされることを示した点にあった。「大福帳＝単式簿記」などという単純な発想しか有していなかった当時の日本の近代（会計学）主義者の研究態度に重要なアンチ・テーゼを示したのである。

中井家の諸帳簿記録は、極めて厳格な「検印」制度によって、各種取引の「複記性」が保証され、それらは最終的に「店卸下書」に統合されていく。こうした「検印制度」は紛れもなく、西欧型の取引対置記入法（「帳合せ」）の日本的な代替物であった。

また中井家仙台見世（店）と仙台店集団の統括管理部門であった仙台元方の「店卸目録」は、「和式複式決算」[第二の決算形式]の「理想型」を構成する基礎となった。さらに中井家の簡易合併方式による本支店会計組織の構造に関する小倉の析出は、日本における会計史と経営史との関連の構造と、当時の海外の会計史学との対話を十分に意識した点で、今日においてもその国際性の光彩を少しも失ってはいないのである。

「イタリア式複式簿記」における「対話の構造」

ところで一般に「イタリア式複式簿記」とは、ある Entity が支配する経

済財の変動を实在勘定と名目勘定によって二面的に把握し、財産計算と損益計算とを二元的に遂行する会計測定機構であるとされる。またこうした勘定組織は、人名勘定・物財勘定に資本・名目勘定が最終的につけ加わることによって完成したというイメージが残存している。

しかし「イタリア式複式簿記」の歴史的意義は、まず「企業」（経営）と「家計」（所有）との勘定の上での分離ということに求められる。次に重要なのは、複式性の二元性もまずあらゆる相手項目と「資本主人名勘定」との対話の技法として出発したのであり、複式簿記も、総体的には「企業（財産の抽象体）」と「家計（資本主）」との対話の構造である（泉谷, 1964, 1980）。

こうした人名勘定としての資本主勘定（account）の側面が、英国等では企業と所有主・社会との信認関係と結びついて、会計責任・説明責任（accountability）の概念を形成し、また企業会計の「外部志向性」を分化させていったのである。

日本の近世江戸期における合理的精神が、西欧に劣らない資本・利益に関する二重測定システムを実際に産み出していたとしても、こうした報告会計システムに関する側面の問題はどうであったのか。

近世日本の大商家における元方と番頭経営との分離——執行機能とその正統化——

「和式複式決算簿記」を産み出した多くの新興大商家では、本家集団の当主達（同苗）により中央機関（元方）が形成された。そこでは、当主やその同族自身が経営に携わるのではなく、番頭経営、すなわち有能な専門経営者である奉公人重役に経営が委ねられる場合が多かった。こうして家産を支えるための家業を営む場である「店」＝「表」は、家産を維持し、同族団構成員の生活を監理する機関ある「元方」＝「奥」から截然と分離された（西川登, 1993:38）。ここでは、西欧の専売特許のようにいわれる「所有と経営との分離」が貫徹されていたのである。ただしそこでの「当主と番頭」との支配関係は、英国流の「信認関係」や、また通常の契約関係に

見られるような水平的・機能的なものではない。

例えば1673年創業の三井家（越後屋）は、鴻池家等とは対照的に大名貸を極力控え、現金安売掛値なしの商法により、その事業を拡大した。その後、全事業を一族同苗の共有とし集団指導体制を採用しつつ、1703年には主人に代わり店務を執行する経営者管理体制がしかれ、初代「名代」として若干28歳の中西宗助が就任した（西川登, 1993:52-6）。

興味深いのは、1716年に三代目当主に就任した三井高房が、その番頭である中西宗助に残した『町人考見録』である。

「此書は中西宗助、……今先祖親くの功績によって、同名一致に家業をつとめ、先は時節を得、商に不足なしといへども、町人の盛衰は其主の守りにあり。よつて昔よりの町人の家を失ふ趣を、親（二代目当主高平一引用者）に尋てしるし置……予是を（中西宗助へ）あたふ」（三井, 1975:232-3, 上点, 引用者）。

これは、歴代の46に及ぶ有名商家の、大名貸し等による破産の原因を強調しつつ、賢明な経営を遂行することで、宗助を筆頭とする三井家の財産の受託者への教訓を残したものである。これを商家の実用主義的な訓戒としてかたづけてしまうことは簡単である。

しかし同時に、ここには日本の政治的統治形態として繰り返し現われる、「公家と武家」、公家内部での「帝と摂関」、武家内部での「將軍と執権・老中」等の関係に見られるような、正統性の「源泉のレベル」と「決定・執行のレベル」との分化の構造をも見ることができよう。

すなわちこの文書は、実務に携わる宗助（又はその後継者）に対する「正統性」付与の文書としての機能を果たしているようにも思われる。「当主と番頭」との関係は、西欧流の信認関係や契約関係ではなく、むしろこうした日本的政治形態の「商家版」とでもいふべき上下関係であった。

内部報告会計制度の形成

近世日本の最高水準の内部報告会計制度の全体像は、東京・中野の三井文庫所蔵の原史料を詳細に管見した、経営史家・会計史家、西川登の優れた三井家に関する研究成果によって現代に甦った。

三井家「元方」は、企業形態としては、あくまでも当主の「家業」または本家同苗集団であったが、管理体制の観点から見れば、事業部制組織の本社的機構であった。それ故、ここでは各地の店舗を階層的に管理する会計報告制度が要請された。すなわち、「元方」^{もとかた}では「家産」維持のための期末資本算定が要請され、他方、「店」^{たな}では業績評価とそれに基づく経営報酬としての利益分配のための期間「損益」計算が重視された（西川登, 1993: 204）。

特に1710年に、三井家の家政と事業全体を総括する持株会社としての「大元方」が形成され、「京都本店」、「京都両替店」、「松坂店」に投融資がなされ、更にそこから利益責任単位としての各支店へ独自の投融資がなされるという階層的な組織構造が確立する。

こうした「店」の統合的な把握をなすという中西宗助の執念が実る形で、多数の店舗を管理する手段としての会計組織、すなわち「複式決算会計」に基づく報告書制度が組織された（西川登, 1993:173）。

すなわち、例えば「京都両替店」傘下の各「店」は「勘定目録」等の決算報告書を「京都両替店」に提出し、「京都両替店」はそれらと、傘下諸「店」への投資・利益に関して、今日の「持分法」によく似た会計処理を施すことによって作成した自店の「勘定目録」を共に「大元方」に提出するという階層的な内部会計報告制度が形成された（西川登, 1993:157）。

まさに、各利益計算単位における「損益報告」と家産全体の観点からの「期末資本計算」との階層的統合の構造を示すものである。

出島オランダ商館の会計帳簿

ところで近世江戸期においては、平戸の出島において日本最初の西欧型複式簿記がオランダ人によって実践されていた。オランダ商館簿記である。

今日現存する原史料は1620年から1808年までの会計帳簿であるが、これらは現在、行武和博を中心として全翻訳の作業が終了している（平戸史編さん委員会編, 2000, 1998, 2007）。

オランダ商館簿記は、その全期間にわたり基本的な記帳形態に変化はみられず、1635年ロンドンで出版されたRichard Daforneの簿記書『The Merchants Mirrour（商人の鏡）』に示された記帳例にほぼ等しいとされる。

「このダフォルネの簿記書は、彼がアムステルダム滞在中に習得した当時のオランダの簿記法を、故国イギリスの商人たちに普及するために出版したものである。このことから考えると、出島商館で作成されていた会計帳簿は、当時オランダ本国で実践されていた複式簿記法によって処理されていたものと言えよう」（行武, 1992:795-6）。

出島オランダ商館の会計帳簿は、バタヴィアの東インド総督府を本店とする支店帳簿であり、主要簿は仕訳帳と総勘定元帳である。1642年度の会計帳簿では期末に総記法による商品名勘定借方から販売益が損益勘定に振り替えられる。すなわち出島商館の会計帳簿で算出される営業成績は、「純益」（営業諸経費を控除する以前の輸入商品に関する利益）の計上までに留まっており、この「純益」が最終的にバタヴィア本店勘定貸方に振り替えられる決算構造になっている（行武, 1992:822-4）。まさしく精巧な期間損益計算の複式簿記体系であった。

かなりの長期間にわたって実践されていたこれらの西欧型複式簿記が、日本の各商家に何らかの影響を与えた可能性も否定できないが、現在までのところそうした和式帳合への直接的な影響は、残念ながら実証されては

いない。

4 近世会計制度をめぐる概念的枠組み

日本の「近代化」の条件を形成した「近世」

このように、欧米人達を驚愕させた明治以後の日本帝国の急成長は、幕末開港前までに達成されていた江戸時代の経済発展をその基本的条件のひとつとしていた（西川登, 1993:2）。

他方、儒教思想の日本的展開と近世科学思想との接合による「禁欲的」・「合理的」・「科学的」精神や、市場化に向けた経済思想も着実に町人社会の中で自生的に構築されていた。

こうした状況下で、17世紀から18世紀初頭にかけて、上方を中心とした新興大商家において、西欧型「複式簿記」と機能的にはそれほど遜色のない「和式複式決算簿記」が形成・実践されていった。そこでは当初から「所有と経営との分離」・「企業と家計との勘定の上での分離」がなされ、本支店会計、結合・分割会計、費用・収益の繰延・見越経理等々の処理に基づく壮大な規模での「内部報告会計制度」が形成されていったのであり、しかも計算の正確性においては、むしろ西欧型「複式簿記」を遥かに凌ぐものであった。

英国型の「近代化」のシェーマにおいては、商業資本・前期的資本から産業資本への展開において、前者を担った商業資本家と後者を担った中産生産者層との相違が強調され、「前期的資本主義」と「近代資本主義」との系譜上の断絶性が主張される。しかし日本の場合、近世において形成された商業資本や商家の組織・思想は、その後の「近代化」においていささかも淘汰されることはなく、ある意味では現代においてもひとつの通奏低音をなしているようにさえ見える。

「家産内合理化」と近世商家の会計における外部志向性の欠如

かつて M.ヴェーバーは、「近代資本主義」の形成要因のひとつとして「合理的経営」の問題をとりあげた。ここで「合理的経営」とは、(1) 実践的な自律的規律性、(2) 強い拡大志向性、(3) 形式合理性の最高形態としての複式簿記から構成される概念である。

注意を要することは、ヴェーバーの場合、この近代的な「合理的経営」概念は、家政的「大経営」(Großbetrieb)と対立する、むしろ小生産者の「小経営」にその系譜が求められるような概念として指定されたということである。またそこではプロテスタントに象徴的にみられるような自らの資本計算の「超越者」(神)への報告の重要性が語られたのである。

従って、高度に合理的な資本計算が実施されていたからといって、それは「近代資本主義」にとり適合的な「合理的経営」であるというわけにはいかなかったということである。

他方、日本の近世における各商家の会計報告実践は、まぎれもなく「家政」から区別された「企業」の内部報告実践であったが、その際の「企業」会計は、「社会」に対する外部志向性を有するのではなく、結局は広義の「家政」に無限に回収されて行く「家業」会計として機能していった。すなわち各商家の会計報告は、半神聖化された「家」の枠を超えることはなく、また「家」(当主)によってのみ正統化されたのである。その意味で、私達はこうした内部会計報告制度の枠内での資本計算による「合理化」を「家産内合理化」として捉えることができるであろう。

5 むすび

近世日本において、各商家の会計は、相互の繋がりと社会性を有しない「秘伝」として各商家内部でのみ伝えられることになった。

近世日本においては、西欧のルカ・パチョーリの簿記書(彼の『スンマ』

という数学書の中のひとつの章、1494年)のような、それを読めば誰でもが最低限の複式簿記に関する知識が得られるような「テキスト」も発見されていない。

会計は、経済そのものではなく、「書く経済」であるといわれる。「和式複式決算簿記」も家業の「合理化」のために考案されたものであった。

しかし例えば、西欧の「合理化」の過程で考案された「楽譜」（「書く音楽」）が、西欧音楽一般の合理化に決定的に寄与したことと比較すれば、近世日本の邦楽の場合には、そうした普遍的なマニュアル（教科書）は存在せず、あくまでも特定の師匠に直接についてその藝を完全に習うことが要求され、その伝承は「秘伝」とされた。一般的なテキストなしの「和式複式決算簿記」も、その継承は同様に「秘伝」とされたのである。

近世商家の会計が「外部志向性」を有しなかったことについては、何よりも近世日本における資本市場の未発達の問題や、商家の財産・所得に関する納税の義務の欠如（代わりに屢々上納金が課せられた）という「外的条件」の問題を指摘しておく必要がある。しかし他方、こうした欠如を産み出した「内的条件」が、当時の会計組織それ自身に構造的に内在していたのかも知れない。これは今後の研究課題である。

ともあれ、明治以降の「近代化」の流れの中で、日本会計制度はこうした「内部」会計から「外部」会計制度を分化させる。ところでその際、「外部」とは、果たして「社会」であったのだろうか。

参考文献

- Bellah, Robert (1957) *Tokugawa Religion, The Values of PreIndustrial Japan*, Free Press, New York. (堀 一郎・池田 昭訳『日本近代化と宗教倫理』未来社, 1966年)
- Craig, Albert (1965) "Science and Confucianism in Tokugawa Japan" in Marius B. Jansen ed., *Changing Japanese Attitudes towards Modernization*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey. (平川祐弘訳「徳川時代の日本における科学と儒教」細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店, 1968年所収)
- Hall, John W. and Marius B. Jansen ed. (1968) *Studies in the Institutional History of Early Modern Japan*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey. (宮本又次・新保 博監訳『徳川社会と近代化』, ミネルヴァ書房, 1973年)
- 平井泰太郎 (1936) 「出雲帳合の性質」神戸大学『国民経済雑誌』第61巻第3号, 『平井泰太郎経営学論集』千倉書房, 1972年所収
- 平戸市史編さん委員会編 (1998) 『平戸市史 海外資料編 III』平戸市
- 平戸市史編さん委員会編 (2000) 『平戸市史 海外資料編 II』平戸市
- 平戸市史編さん委員会編 (2007) 『平戸市史 海外資料編 I』平戸市
- 石田梅岩 (1738) 「都鄙問答」加藤周一編『富永仲基・石田梅岩』日本の名著 18, 中央公論社, 1972年所収.
- 泉谷勝美 (1964) 『中世イタリア簿記史論』森山書店.
- 泉谷勝美 (1980) 『複式簿記生成史論』森山書店.
- 海保青陵 (1813) 「稽古談」塚谷晃弘・蔵並省自編『本田利明・海保青陵』日本思想大系44, 岩波書店, 1970年所収.
- 河原一夫 (1977) 『江戸時代の帳合法』ぎょうせい.
- 北島正元 (1962) 『江戸商業と伊勢店』吉川弘文館
- 丸山真男 (1941/2) 「近世日本政治思想における『自然』と『作為』」『国家学会雑誌』第55巻第7,9,12号, 『日本政治思想史研究』東京大学出版会所収, (translated by Mikiso Hane, *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*, University of Tokyo Press, 1974), 『丸山真男集』第2巻, 岩波書店, 1996年所収.
- 丸山真男 (1958) 「ベラー『徳川時代の宗教』について」『国家学会雑誌』第72巻4号, 前掲Bellah, 堀 一郎・池田昭訳『日本近代化と宗教倫理』所収. 『丸山真男集』第7巻, 岩波書店, 1996年所収. (本文中の引用頁は堀・池田訳本所収論文)

- 丸山真男 (1980) 「闇齋学と闇齋学派」西順蔵・阿部隆一・丸山真男編『山崎闇齋學派』日本思想大系31, 岩波書店, 1980年所収. 『丸山真男集』第11卷, 岩波書店, 1996年所収.
- 源 了圓 (1968) 「徳川時代における『近代思想』の形成」古田光・作田啓一・生松敬三編『近代日本社会思想史』近代日本思想史大系 (1), 有斐閣.
- 源 了圓 (1971) 「先駆の啓蒙思想家 蟠桃と青陵」源 了圓編『山片蟠桃・海保青陵』日本の名著23, 中央公論社所収.
- 三井高房 (不明) 『町人考見録』, 中村幸彦編『近世町人思想』日本思想大系59, 岩波書店1975年所収
- 宮本又次 (1970) 『小野組の研究』第二卷, 大原新世社
- Najita, Tetsuo (1987) *Vision of Virtue, The Kaitokudo, Merchant Academy of Osaka*, The University of Chicago Press, Chicago and London. (子安宣邦訳『懷徳堂—18世紀日本の「徳」の思想—』岩波書店, 1992年)
- 西川如見 (1719) 『町人囊』中村幸彦編『近世町人思想』日本思想大系59, 岩波書店, 1975年所収.
- 西川 登 (1993) 『三井家勘定管見』白桃書房.
- 西川 登 (1995) 「会計組織と簿記技法」安岡重明・天野雅敏編『近世的経営の展開』日本経営史1, 岩波書店所収.
- Nishikawa, Noboru (1994) “The accounting inheritance of the Tokugawa period”, in Takeshi Yuzawa ed., *Japanese Business Success, The evolution of a strategy*, Routledge, London and New York.
- Norman, Herbert (1949) “Ando Shoeki and the Anatomy of Japanese Feudalism” *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Third Series Vol.2, (大窪愿二訳「忘れられた思想家 安藤昌益のこと」大窪愿二編訳『ハーバート・ノーマン全集 第三卷』岩波書店, 1977年所収)
- 小倉栄一郎 (1962) 『江州中井家帖合の法』ミネルヴァ書房.
- Ogura, Eiichiro (1982) “The Nakai Family’s Bookkeeping System”, *Accounting and Business Research*, Vol.12.148-52.
- 大森研造 (1921) 「我国在来の商業帳簿」京都大学『経済論叢』第12巻第5号
- 作道洋太郎 (1966) 「鴻池両替店の帳合法」『社会経済史学』第32巻第2号
- Suzuki, Tessa Morris (1989) *A History of Japanese Economic Thought*, Routledge, London. (藤井隆至訳『日本の経済思想—江戸期から現代まで—』岩波書店, 1991年)
- 高寺貞男 (1978) 「和式簿記法と洋式簿記法の比較会計史」京都大学『経済論叢』第121巻第4・5号, 187-96.

- Takatera, Sadao and Nishikawa, Noboru (1984) "Genesis of Divisional Management and Accounting System in the House of Mitsui, 1710-1730", *The Accounting Historians Journal*, Vol.11, No.1, Spring, 141-9.
- 山片蟠桃 (1820) 「夢ノ代」水田紀久・有坂隆道編『富永仲基・山片蟠桃』日本思想大系43, 岩波書店, 1973年所収.
- 山下勝治 (1936) 「出雲帳合に於ける両面勘定」『彦根高商論叢』第20巻.
- 安岡重明 (1960) 「前期的資本の蓄積過程—鴻池算用帳の研究の一節— (一)」『同志社商学』第11巻第5号
- Weber, Max (1921) *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, II, Hinduismus und Buddhismus*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. (池田 昭・山折哲雄・日隈威徳共訳『アジア宗教の基本的性格』勁草書房, 1970年)
- 行武和博 (1992) 「出島オランダ商館の会計帳簿—その帳簿分析と日蘭貿易の実態把握—」『社会経済史学』第57巻第6号
- 行武和博 (1998) 「平戸オランダ商館の会計帳簿—その記帳形態と簿記計算構造—」平戸市史編さん委員会編 (1998) 『平戸市史 海外資料編Ⅲ』所収